

「たたむ」「ひろげる」～日本人の暮らし

5月5日は休みなのに、どうして3月3日は休みではないのか。子どもの頃、ひな祭りの日にはこの思いが頭の中をめぐり終業が待ち遠しかった。歳の離れた長姉が生まれた時に調達したという古風な5段飾りのひな人形があり、学校が終わると近所の女の子たちが我が家に集まった。当時は大きいと感じたが大人になってみれば小さな段飾りで、それは1尺×1尺×3尺程度の木箱にぴったりと納まっていた。人形は勿論のこと、ぼんぼり、紅梅白梅、もうせん、段板、骨組まですべてが入っていて、その木箱自体が最下段の部材で蓋は最上段の段板だった。ネジや金具はなくて、木を組んでいくことで5段のひな壇が出来上がり、片付けるときも木組みを分解しながら考えて入れればぴったりと木箱に納まった。子どもにとってはかなり時間のかかる仕事だったが、きれいに納まったときの爽快感は格別だった。ひな壇を組み立て赤いもうせんを広げておひなさまを飾ることと、最後にきれいに包んで仕舞うことは、私にとってひな祭りのもう一つの楽しみでもあった。小さい段飾りとはいえ、広げればかなりのボリュームになるあのひな人形が、魔法のように木箱に納まる、造った職人さんの心意気が伝わるといふものである。我々姉妹に娘が生まれると、この愛すべき木箱が送られてきてそれぞれの家を巡ったが、当の子どもたちよりも母親のほうが喜んでいたものだ。

古い伝統構法の家を改修を依頼されたとき、依頼主が相談の最中に取り立ててひな人形のことを話し始めた。「実は孫のおひなさまを預かっていて・・・」とやや困り顔だった。今のおひなさまは大きいから我が家のものとは比較にならないだろうが、どんな様子で仕舞われているか見せてもうと、幾つもの大きさの違う段ボール箱がうず高く積み上げられていて、これがすべてひな人形だという。かなり大きい段飾りだろうが、それにしても…と言葉がなかった。納戸の隅からではカメラに入りきれない。所有者であるお孫さんからも離れて邪魔にされているようでおひなさまが少し気の毒に思えた。ここでは造り手の心意気は影をひそめ、売り手がまるで初節句への大人たちの思いを呑みこんだ図が浮かんだ。



積み上げられた ひな人形の段ボール箱

着物、布団、ちゃぶ台など、「たたむ」「ひろげる」を繰り返してきた日本人の暮らしは、造り手から使う人までの一連の関係の中で成り立ってきたのだろう。一方、今の自分の暮らしを顧みれば、着物など年に一度だって着ることはないし、寝るのはベッドで食事のためのテーブルと椅子は常にスペースを占領していて、畳んだり広げたりすることはほとんどなくなっている。押入のない部屋で寝起きし、衣類を吊るして収納する暮らしが通常になりつつある。が、きちんと座って着物を畳む仕草や、暮らしの様々な道具を折りたたむ工夫や、仕舞うための箱などは魅力にあふれ心惹かれるものがある。屏風、提灯、扇子、すだれ、障子、雨戸に戸袋、箱階段、重箱、針箱、大工道具箱などなど。そして一番の迫力はやはり畳んだり広げたりできる伝統構法の家だろう。

伝統構法の家の魅力は佇まいや建具の美しさや、使われる材料の説得力以外にもいろいろある。火事の際、建具や畳を持ち出して避難させたというし、密集した町なかでは火災の延焼を防ぐために家を解体して空地を確保したという。火事を想定してあらかじめ部材をストックしておき、被災してもすぐに家が建てられたという。火事の多い地域ならではの知恵だろう。また、規模の大きな建物でも、解体して貸したり借りたり、不要になった建物を解体し、入札等で売買するなども数十年前までは一般に行われていたわけで、いかにも“もったいない”という言葉をもつ国らしい建物である。家の工法については、1865年に鎖国の江戸を訪れたシュリーマンが旅行記の中で次のように書いている。トロイア遺跡発掘の6年前のことである。「梁と桁の継ぎ目にはつねに相当

な余裕をもたせ、日本では恐るべき頻度で起こる地震の折、動いたり広がったりできるようにしてある——地震は一カ月に六回も起こり、ときには日に二回も揺れることもあるという」(ハインリッヒ・シュリーマン『シュリーマン旅行記 清国・日本』講談社学術文庫)と。それは建築家のいなかった時代、地震国日本の多くの工匠たちの長年の経験と知恵が培ったものだろう。実際、激震の後、築数十年の家が潰れている横で、シュリーマン訪日以前の伝統構法の家が相当傾いても潰れることなく建っている事実がある。伝統構法の家最大の魅力は、地震国日本の工匠たちの叡知の結集ともいえる、この粘り強さではないだろうか。

しかし昨今、被災地では潰れていないのに傾いていることで、解体が可能な伝統構法の家「危険」の赤紙が貼られているのを見る。被災者は仮設住宅に住む不安な気持ちのなか、期限付き無料解体への決断を迫られる。改修が可能なことを伝え、仮設住宅などを造るお金を改修の一部に充てることができれば、そしてもっと時間をかけた多様な選択肢を示すことができればと、解体されてしまった民家の佇まいに思いを馳せる。「たたむ」「ひろげる」が可能な伝統構法の家には別の張り紙が必要だろう。新しく造るとなればかなりハードルの高い貴重な建物ゆえである。

今後、木造の建物は解体移築が可能なものを造るべきではないか。かつての工匠たちの知恵に学び、新しい条件に対応しつつ、そして売り手に呑みこまれることなく、である。

(2017年4月)